



(公財) 山階鳥類研究所

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
電話：04-7182-1101 FAX：04-7182-1106
<http://www.yamashina.or.jp>

第18回山階芳麿賞

橘川次郎・小西正一両氏への 特別賞の贈呈を決定しました

第18回山階芳麿賞として、特別賞を橘川次郎氏（オーストラリア・クイーンズランド大学名誉教授）、小西正一氏（アメリカ合衆国・カリフォルニア工科大学名誉教授）に贈呈することを決定しましたのでお知らせいたします。



橘川次郎氏
特別賞について



小西正一氏

山階芳麿賞は、日本の鳥類の研究や保護に携わられた方々を対象に贈呈してまいりましたが、今回受賞されるお二人の研究は主として日本国外で行われたものであるため、通常山階芳麿賞の枠での贈呈に困難がありました。しかし日本出身で世界的な業績を挙げ、日本の鳥学にもさまざまな意味で多大な影響を与えてきたお二人を表彰することは、日本における鳥学研究の発展に資することを目的とする山階芳麿賞の趣旨に合致すると判断して、特別賞をお二人に贈呈することになったものです。

贈呈理由

お二人への贈呈理由は本資料の添付の資料(1)にあるとおりですが、あらまは次のとおりです。

橘川次郎博士の専門分野は、動物行動学、生態学、保全生物学。山階芳麿賞選考委員会（林良博委員長）では、オーストラリア産のハイムネメジロを対象とした行動学、生態学、進化学の多岐にわたる研究業績と、熱帯雨林における鳥類群集の研究業績に加え、多くの後進を育成し、日本とオーストラリア、さらには英米の学界との交流に貢献した功績を高く評価しました。

小西正一博士の専門分野は動物行動学、神経行動学。選考委員会では、鳥類の歌の学習と音源に関する情報処理についてさまざまな新知見を得て、神経行動学と呼ばれる学問分野の確立に寄与したことに加え、多くの後進を育てるとともに、日本の研究者と一般市民を啓発した功績を高く評価しました。

山階芳麿賞

「山階芳麿賞」は財団設立50周年にあたる平成4（1992）年に山階鳥研の創立者、故・山階芳麿博士の功績を記念し、鳥学の発展並びに鳥類保護の振興に寄与することを目的として設けられました。表彰は隔年行われ、日本の鳥類の研究または鳥類保護に関し特に顕著な功績のあった個人または団体に贈られます（資料(3)参照）。今回は日本国外で研究を行った方を対象とするため、特別賞を贈呈いたします（本ページ左側参照）。

記念シンポジウム『鳥の研究はここまで進んだ ～人は鳥から何をまなべるか～』

橘川次郎・小西正一両氏の受賞を記念した記念シンポジウムを下記日程で開催します。詳細については改めてご案内いたします。

【日付】平成26（2014）年9月23日（火・祝）

【場所】有楽町朝日ホール

東京都千代田区有楽町 2-5-1 有楽町マリオン 11F

【コンビーナー】（五十音順）

山岸哲（山階鳥類研究所名誉所長・

兵庫県立コウノトリの郷公園園長）

渡辺茂（慶應義塾大学名誉教授）

【演者】（五十音順）

内山博之（鹿児島大学大学院理工学研究科教授）

江崎保男（兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科教授）

岡ノ谷一夫（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻
生命環境科学系教授）

長谷川博（東邦大学名誉教授）

※この資料に掲載した写真（デジタルデータ）をご希望の方は下記までご連絡ください。

本件についてのお問い合わせ先

(公財) 山階鳥類研究所 広報主任：平岡考

電話：04-7182-1101 FAX:04-7182-1106

山階芳麿賞特別賞の贈呈理由

山階芳麿賞選考委員長 林良博

橘川次郎博士

橘川次郎氏は、オーストラリア産のハイムネメジロを対象として行動学、生態学、進化学の多岐にわたる顕著な研究業績を挙げました。特に、グレート・バリア・リーフのヘロン島において、1965年から約30年間にわたり、同島に生息する約200つがいとそのひなのすべてに色足環を装着して個体識別し、追跡調査した個体群生態学の研究は、野外個体群の長期変動についての詳細なデータとして貴重なもので、冬季の社会行動（群内の優劣関係）と稀に訪れるサイクロンが個体数調節の鍵を握っていることを明らかにしました。橘川氏が主導したこの研究は、20世紀に大いに発展した動物生態学に、同世紀に確立された動物行動学をとりいれ、さらには島嶼の鳥類個体群で起きる行動および形態の進化の本質的解明に迫る、まさに現代的かつ総合的なもので、在外であるとはいえ、日本生態学者が到達した最高峰のひとつであると言えます。

橘川氏のもうひとつのテーマは、熱帯雨林における鳥類群集の研究にあり、このために、熱帯雨林の鳥類の種構成と環境選択を、コンピュータを用いて定量的に比較・分析する研究手法を開発し、先駆的な研究を行いました。そして、1993年にはオーストラリア熱帯雨林共同研究センターの初代センター長に就任し、オーストラリア生態学会長（1974～76）をも務めました。

橘川氏はこれらの研究の過程で、多くの後進を育てました。また、行動学や群集生態学の教科書などを編集・執筆し、鳥類を科ごとに詳説した"Bird Families of the World"にはシリーズ全体の編者として参加しています。

橘川氏はこれらの成果により、オーストラリア生態学会から Gold Medal（1986）、オーストラリア鳥類学会から Serventy Medal（1991）を受賞しました。さらに橘川氏はオーストラリアに移住後も日本の研究者と交流を続け、日本の生態学界・鳥類学界とオーストラリア、さらには英米の学界との人的交流に大きな役割を果たしました。そして、研究の集大成を日本語で執筆した『メジロの眼』は日本の研究者と一般市民を大きく啓発しました。

これらの功績をたたえて、山階芳麿賞選考委員会は橘川次郎氏に山階芳麿賞特別賞を贈ることがふさわしいと判断いたしました。

小西正一博士

小西正一氏は、鳴禽類が正常なさえずりをするためには、幼鳥のときに同種の成鳥のさえずりを記憶し、それを「鋳型」として、自身のさえずりを聞いて、鋳型と照合し、修正するフィードバックをおこなうことが必要であることをはじめ、鳴禽類のさえずりの形成について多くのことを明らかにしました。また、鳴禽類の雄がさえずり、雌がさえずらないのは、雄の幼鳥の脳に女性ホルモンであるエストロゲンが作用して、脳の歌制御系の発達を促し、雌ではそれがないために歌制御系となるべき細胞が退化し死ぬことで、脳の性的二型が作られるためであることを明らかにしました。さらに、メンクロウが暗闇でネズミを検出する行動の神経解剖学的な研究から、脳の下丘に聴覚空間の地図があることを発見し、また左右の耳に届く音の時間差と音圧差によって音源の定位を行っていること明らかにしました。この成果は機能と構造を結びつける画期的な研究として多くの教科書で紹介されています。

小西氏の研究はこのように、鳥類の歌の学習と音源に関する情報処理についてさまざまなめざましい新知見に到達し、またその過程で多くの後進を育成しました。その結果、動物行動学と神経科学を橋渡しし、神経行動学と呼ばれる学問分野の確立に大きく寄与し、関連分野にもさまざまな波及効果をもたらしたものです。日本人の研究者にも大きな目標となる存在であり、またさまざまな媒体を通じてのフクロウの音源定位の研究の紹介や、日本語で書かれた著書『小鳥はなぜ歌うのか』などによって、日本の一般市民も大きく啓発されてきました。

これらの功績をたたえて、山階芳麿賞選考委員会は小西正一氏に、山階芳麿賞特別賞を贈ることがふさわしいと判断いたしました。

第18回山階芳麿賞 特別賞受賞者

橋川次郎博士

きっかわ・じろう

1929年12月15日 横浜生まれ

専門：動物行動学、生態学、保全生物学

1950年 農林省水産講習所増殖科卒業

1950年 農林省水産庁漁政部農林技官（～54年）

1955年 京都大学理学部動物学教室（～57年）を経て
オックスフォード大学動物生態学専攻

1958年 ニュージーランド オタゴ大学動物学教室（～61年）

1961年 理学博士（京都大学）

1961年 オーストラリア ニューイングランド大学動物学教室（～64年）

1965年 クイーンズランド大学理学部（～94年）

この間、動物学主任教授、熱帯林生態学共同研究センター初代センター長、オーストラリア生態学会長、クイーンズランド鳥学会長、国際林学会理事などを歴任

1995年 熱帯林生態学共同研究センター退官

2001年 京大大学生態学研究センター客員教授（～02年）

2002年 総合地球環境学研究所客員教授

2007年 山階鳥類研究所将来構想委員会特別委員（～08年）

現在 クイーンズランド大学名誉教授

小西正一博士

こにし・まさかず

1933年2月17日 京都生まれ

専門：動物行動学、神経行動学

1956年 北海道大学理学部動物学科卒業

1958年 北海道大学大学院理学研究科修士課程（動物学専攻）修了

1963年 カリフォルニア大学バークレー校博士課程修了 Ph.D. 取得

1963年 アレクサンダー・フォン・フンボルト奨学研究員（チュービンゲン大学）（～64年）

- 1964年 国際脳研究機構 (IBRO) 奨学研究員 (マックスプランク研究所 (ミュンヘン))
(~65年)
- 1965年 ウィスコンシン大学マディソン校生物学助教授 (~66年)
- 1966年 プリンストン大学生物学助教授
- 1970年 プリンストン大学生物学准教授
- 1975年 カリフォルニア工科大学生物学教授 (~13年)
- 1985年 アメリカ科学アカデミー会員
- 現在 カリフォルニア工科大学名誉教授

山階芳麿賞について

山階鳥類研究所は、平成 4(1992)年 7 月に行われた財団創立 50 周年記念行事の一環としてこの賞を設けることにした。日本の鳥学及び鳥類保護に寄与された、山階鳥類研究所の創立者・故山階芳麿博士の功績を記念して、この賞を「山階芳麿賞」と名付けた。

山階芳麿賞は、日本の鳥類の研究及び鳥類保護に顕著な功績のあったものを讃え、わが国の鳥学の発展並びに鳥類保護の振興に寄与することを目的としている。

受賞者は「山階芳麿賞」選考委員会で選考される。受賞者は、隔年度、原則として 1 名とし、選考の結果該当者がいない場合には、その年度の表彰は行わない。選考委員会は学識経験者その他理事長が必要かつ適格と判断する者 (5~12 名) で構成される。受賞者の選考は、出席選考委員の過半数をもって行われる。

表彰は山階鳥類研究所総裁・秋篠宮文仁親王が行い、受賞者には表彰状と山階芳麿賞記念メダルが贈呈される。記念メダルのデザインは、表・山階芳麿博士肖像、裏・ヤンバルクイナのレリーフとなっており、受賞年と受賞者氏名が刻印される。ヤンバルクイナは沖縄県で発見され、昭和 56 (1981) 年に山階芳麿博士らが新種として発表した山階鳥類研究所のシンボルの一つ。なお、平成 15 (2003) 年度からはさらに副賞として「朝日新聞社賞」(賞金 50 万円と盾) が贈られている。

歴代の受賞者は下記のとおり。

回数	氏名	所属・職名	受賞年月日	備考
第一回	羽田健三	信州大学名誉教授	平成 4 年 7 月 3 日	H6 年 11 月逝去
第二回	松山資郎	山階鳥類研究所顧問	平成 5 年 7 月 5 日	H12 年 8 月逝去
第三回	中村 司	山梨大学名誉教授	平成 6 年 7 月 5 日	
第四回	黒田長久	山階鳥類研究所所長	平成 7 年 7 月 5 日	H21 年 3 月逝去
第五回	中村登流	上越教育大学名誉教授	平成 8 年 7 月 3 日	H19 年 11 月逝去
第六回	正富宏之	専修大学北海道短期大学教授	平成 9 年 9 月 9 日	
第七回	樋口広芳	東京大学大学院教授	平成 10 年 7 月 4 日	
第八回	山岸 哲	京都大学大学院教授	平成 11 年 7 月 3 日	現・山階鳥類研究所名誉所長
第九回	藤巻裕蔵	帯広畜産大学教授	平成 12 年 6 月 17 日	
第十回	小城春雄	北海道大学大学院教授	平成 13 年 6 月 1 日	

第十一回	中村浩志	信州大学教授	平成 14 年 6 月 7 日
第十二回	石居 進	早稲田大学名誉教授	平成 15 年 9 月 23 日
第十三回	由井正敏	岩手県立大学教授	平成 16 年 9 月 23 日
第十四回	長谷川博	東邦大学教授	平成 18 年 9 月 23 日
第十五回	立川涼	愛媛大学名誉教授	平成 20 年 9 月 23 日
第十六回	森岡弘之	国立科学博物館名誉研究員	平成 22 年 9 月 23 日
第十七回	日本イヌワシ研究会		平成 24 年 9 月 23 日